

The social welfare in OSAKA



大阪の 社会福祉

2022年7月

806



社会福祉
法人大阪市社会福祉協議会

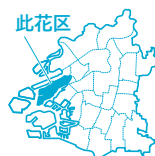
https://www.osaka-sishakyo.jp



▲認知症声かけ訓練は憩の家^のすぐ近くの市営住宅敷地内で実施

此花区

安心して暮らせる地域を
あなたの一声から
〜西島地域〜



此花区^の西島憩の家^で6月4日、西島地域と区社協をはじめとする関係機関の共催により「認知症声かけ訓練」が開催され、地域役員・ボランティアと運営スタッフ合わせて約50人が

参加しました。

この訓練は、認知症によって道に迷ったり、困っている方への声のかけ方を学ぶもので、此花区では初開催となりました。

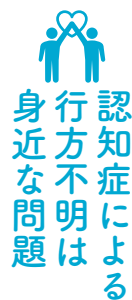
(2面につづく)

HB

朝のゴミ出しで驚いた。普段会っても挨拶もしない近所のお

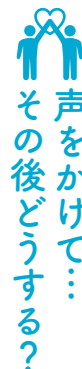
じさんが、向こうから話しかけてきた。「この頃カラス来ませんね」▼先日まで、カラスの集団が電線や屋根の上から見張っていて、ごみを出す人がいなくなるや否や舞い降りて、ビニール袋を破っていた。そうしたカラスへの憤りを、そのおじさんと共感して声を掛け合ったことを思い出した▼ささやかな不幸を共有することでした。新たな人間関係が生まれないのが都会の現実。カラスに感謝しなければならぬ。しかし、私たちの町内にカラスがいなくなっただけというのでは、襲われている町内がどこにある▼近くの商店街でも、店が次々に入れ替わって、商店主同士の人間関係もできないし、商店街の一体感も失われてきている。万引きする客もいる。しかし、その客が近隣の住民だと思つと、叱責もできないのが実態だとか。「万引き止めてください」と段ボールの切れ端に書いて置いてあるのが辛い▼カラスには声を上げて不幸の共感者を求めることができます。人の問題は黙っているしかないこの町が(石)

安心して暮らせる地域をあなたの一声から〜西島地域〜



認知症による
行方不明は
身近な問題

昨年度、警察による認知症の方の保護件数は、此花区だけで100件近くにのぼりました。一方、地域からは「実際に認知症の方に出会ったときにどのように関わればいいかわからない」という声もあり、区社協・見守り相談室や区内の認知症支援に関わる関係機関で、声かけ訓練の実施を検討。警察による保護件数も多く、また見守り活動にも積極的な西島地域に提案し、事前学習会（5月12日）を経て、今回の訓練の日を迎えました。



声をかけて…
その後どうする？

オレンジ色のビブスを着た認知症役のスタッフに、参加者の一人が正面に回り込んで声をかけます。「こんにちは、町会長の〇〇です。今日は暑いんですね。どちらまで行かれるんですか？」「実家が尼崎で、帰らなアカんのよ」…様子を見守る他の参加者も、どう声をかけるか、どこかに本人のことを知る手が

かりはないか、と緒に考えます。場面ごとに発言内容、服装、持ち物が異なり、見守り相談室が発行する認知症の方を対象とした事前登録カード・シールも連絡のきっかけとなるよう設定されています。訓練を通して、こうした取組みへの認知を広げることがねらいの一つです。

ふりかえりでは「最初の声かけはできても、次の一言が難しい」「安心してもらいたいながら、よく観察することが大事」など、この訓練を地域で活かしていくためのポイントを共有しました。訓練をふりかえって、此花区社協会長でもある西島連合



訓練を
地域で活かそう

振興町会・地域社会福祉協議会の岩井政人会長は「皆さんとても熱心に訓練に参加されていて驚いた。西島地域のために、この訓練をどう活かしていくか考えたい」と話します。

当日進行を務めた区社協見守り相談室の冬木泰加さんは「地域と関係機関が何度も話し合いを重ねてきたことで、地域の方が主体的に考えられる内容になったのではないかと思います。西島地域を筆頭に、ほかの地域でも、認知症になってからも安心して生活できる地域づくりに取り組んでいきたいです」と今後を展望しています。

当日の流れ

認知症声かけ訓練

事前説明



POINT/
声かけの基本は
「驚かせない」
「急がせない」
「自尊心を傷つけない」

声かけの実践



POINT/
まずは正面から
目線を合わせて
ゆっくりと声かけ



POINT/
名前や連絡先がわかる
ものを一緒に探します

ふりかえり



主催：西島連合振興町会、西島地域社会福祉協議会、此花区医師会、此花区南西部地域包括支援センター（認知症強化型包括）、このはなオレンジチーム、此花区社会福祉協議会、此花区地域包括支援センター
企画・運営協力：此花区キャラバンメイト連絡会、此花警察署

いくつになっても心に残る行事を 〜片江地域〜



◆ ◆ ◆
こどもから高齢者まで
参加できる自然体験

6月11日、12日の両日、午後7時から東成区片江地域で、コロナ禍によって中止にしていた「片江蛭の夕べ」が3年ぶりに開催されました。

会場となった片江小学校の講堂に1組ずつ交代で入っていくと、囲いのなかを飛んでいる蛭が目飛び込んできます。入口のカーテンが閉まって真っ暗に

◆ ◆ ◆
10年以上続く
地域活動

なると、闇に浮かぶ200匹の蛭の光に歓声があがりました。蛭が放たれている囲いは、片江地域の住民で試行錯誤を重ねて考えたもので、苔を敷き詰めた2台の卓球台と蚊帳で作られています。2分間の制限時間はあつという間に過ぎ、「もっと見たい」と並び直して鑑賞を楽しむ人もいました。

▲小学生の感想文は行事を続けるパワーの源に

片江地域では、さまざまな地域行事を実施しています。片江蛭の夕べは平成22年から開催しており、今年で11回目となります。「町なかで蛭を見られる機会はありません。バスに乗って自然の蛭を見に行くのも大変なので、みんなが気軽に見れるように、地元の小学校に蛭をもってくることにしました」と発起人である東成区社協・片江地域社協の清水弘会長。参加した小学生の感想文には「地いきのみなさん用



片江連合町会「ほたる鑑賞会」平成22年7月4日 片江小学校講堂

意していただきありがとうございます」「計画をたてたり手伝いをしてくれた人にはかんしゃしています。本当にありがとうございます」とのコメントがありました。

「当日の準備や運営はPTAや青少年指導員をはじめとした、たくさんの方と協働しています」と、清水会長と一緒に取り組みを進めてきた片江連合地域振興会の田中英夫会長。子育て世代の方から、子育てを終えた方までが一緒になっての地域行事は、ご近所同士で知り合うきっかけにもなります。

◆ ◆ ◆
「とりあえず
やってみよう」を
合言葉に

▲第1回「蛭の夕べ」(平成22年7月開催)のようす

今年で93歳を迎えた清水会長は「何かをすることで住民同士が触れ合う機会が増えて、つながるきっかけになる。まずは、とりあえずやってみよう、という気持ちで行動することが大事」という考えのもと、花火大会や、昭和39年には絆の強さなど地域のよいところを盛り込んで歌にした片江音頭のレコード作成など、地域で楽しくつながりづくりができる方法を考えて取り組んできました。「片江蛭の夕べ」の2日目の午前中には、小学生が自身の地域の「こども110番の家」を知る機会になるよう、こども110番の家をいくつか周るスタンプラリーを実施するなど、工夫をこらした地域活動を展開しています。「大人になってから、会いに来なくなる人もいます。この間も、こどもの頃に片江地域に住んでいた、という男性とたまたま会う機会がありました。私(清水会長)のことを覚えており、『こどもの頃に参加していた地域行事の思い出が鮮明に残っている』と声をかけてくれました。うれしい瞬間



▲地域で作成した体育祭記念誌と片江音頭のレコード



▲左から清水弘会長、田中英夫会長

です」と清水会長。これまでも、青少年指導員やPTA、町会長など、さまざまな活動をしてきたからこそできたつながりを活かして、片江地域ならではの取り組みを推進してきました。これからも、こどもから高齢者までつながることができる地域づくりを進めていきます。



「ヤングケアラー」について

できることを考える

家族の介護や世話をせざるを得ない子どもや若者、いわゆる「ヤングケアラー」が近年、社会問題となっています。（本誌令和4年3月号、ウェルおおさか令和3年12月号に記事掲載）

ヤングケアラーは、本来、大人が担うと想定されている家事や家族のケアを日常的におこなっています。その内容によっ

ては、重い負担となつて子どもや若者の健康や学業、進路、将来の生活にも影響を及ぼすことがあります。

大阪市では、各区役所にヤングケアラー相談窓口を設置し、ひとりで悩まずに相談窓口相談・連絡するよう呼びかけています。また、ヤングケアラーの支援に向け、今後の支援のあり

方・対策の方向性を検討するため、プロジェクトチーム（区役所、福祉局、健康局、こども青少年局、教育委員会事務局）を設置しています。

このようななか、大阪市内のヤングケアラーの実情を詳細に把握するため、大阪市は市立中学校の生徒（1～3年生）約5万2000人を対象とする調査を研究チームと共同で実施しました。令和4年3月9日に公表された速報値によると、「家族にケアが必要な人がいるか」「自分がその人のケアをおこなっているか」を順に質問し、いずれにも「はい」と答えた生徒（ヤングケアラーとみなした生徒）の存在割合は9・2%となっています。

「今、ほしいと思うサポート、支援」については、「勉強のサポート」がもっとも多く5割を超えています。また、「特にない」という回答も4割近くを占めており、家事や介護のサポートは低い値となっています。

「学校、社会、周囲の人などに対して思ったことがあること」としては、「特にない」が5割を超えており、「家族だから当たり前」のことはしていないという回答も3割を超えています。

「だ」という回答も3割を超えています。また、「同じようなことをしている中学生と出会ってみたい」という回答も1割以上あります。

こどもや若者が求めているサポートをすることは大切ですが、当事者であるこどもたち自身は、ケアを担うことで自身の権利が侵害されていることを自覚しておらず、相談にはなかなかつながらにくい可能性があります。そのため、周囲がヤング

ケアラーへの理解を深め、その存在に気づくことが重要であり、それにより適切な支援につながることを期待されます。

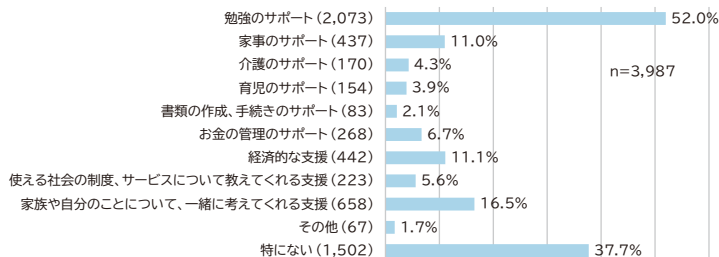
こうした課題が潜在的に広がるなかで、社協として「気づき」を広げるきっかけづくりをしている実践を紹介いたします。

引用…「大阪市立中学校生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 調査結果速報」（令和4年3月 大阪市（osaka.lg.jp）

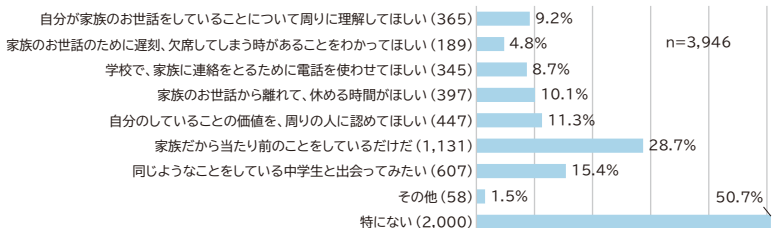
悩みや困りごと

- 今、ほしいと思うサポート、支援では勉強のサポートが最も多く（52.0%）、特にないと回答している者も4割近くを占めた。
- 思ったことがあることとしては、特にないが最も多かった（50.7%）が、家族だから当たり前のことを行っているだけだという回答が多く（28.7%）次いで同じようなことをしている中学生と出会う（15.4%）であった。

あなたが、今、ほしいと思うサポートや支援（複数選択あり）



あなたが、介護、お手伝い、精神的サポートをしてきて、学校、社会、周囲の人などに対して思ったことがあること（複数選択あり）



大阪市立中学校生徒を対象としたヤングケアラー実態調査 調査結果速報（令和4年3月）

ヤングケアラーがしていること

例えば…



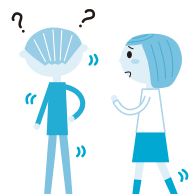
障がいや病気のある家族の入浴やトイレの介助をしている



障がいや病気のある家族の身のまわりの世話をしている



障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている



目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている



家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている



障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている

参考：「大阪市立中学校生徒を対象としたヤングケアラー実態調査結果速報」（令和4年3月）大阪市 shiryou.pdf（osaka.lg.jp）
「ヤングケアラーはこんな子どもたちです」（令和4年6月）一般社団法人日本ケアラー連盟 <https://carersjapan.com/>

「理解することから気づきを広げよう」

見守り活動者向け講演会

「ヤングケアラーを知る」



まずは、理解を
深める機会に

6月10日、福島区社協は、日頃から地域の見守り活動をしている人を対象に「ヤングケアラーを知る」というタイトルで講演会を実施しました。「ヤングケアラー」の当事者であり、その経験をもとにさまざまな活動をしている河西優さんを講師に招いて話を聞きました。

「もともと、福島区にもヤングケアラーの課題が潜在化して



▲日頃、見守り活動をしている住民が参加

身近な人が
気づきの目をもつ

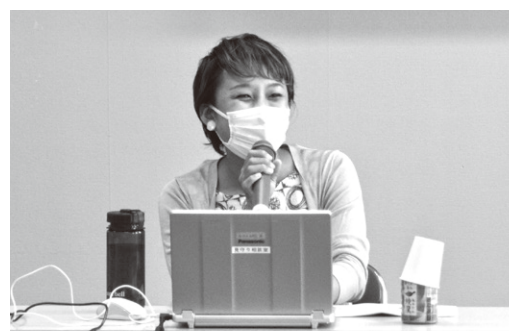
「ヤングケアラー」という言葉は、ニュースで話題になったり特集されたりして最近でこそ知られるようになりましたが、実情を知る人はまだまだ多くありません。そこで今回の講演会では、ヤングケアラーとはどういうものか、国内での現状やさまざまなケースなどを河西さんから聞き、まずは気づきのポイントを知り、視野を広げてもら

いるのではないかと考えて、講演会を企画していました。コロナ禍で中止にしましたが、そんな時に高校の教頭先生から、ヤングケアラーかもしれない生徒がいるという相談を受けました。福島区ではこどもの数が増加傾向にあり、そうしたなかで、他にも同じような子どもや若者がいるのではないかと思

い、まずはヤングケアラーについて理解を深める取組みができればと考え、対象者も考え直して再度企画しました」と区社協・見守り相談室の長谷川安伸さん。

うことを目的としました。聴講者は自分の住んでいる地域で見守り活動をしており、こどもたちと日常的に接する機会も多い地域福祉コーディネーターを中心に呼びかけました。

講演会では、ケアをしている小中学生のこどもたちは、自身がヤングケアラーだという自覚があまりないことや、人によりケアの内容がさまざま把握しにくいこと、家族の問題が複合的に絡んでおり側面的な支援だけでは解決できない、といった話がありました。講演後、参加者からは「近所に幼い兄弟の世



▲講師の河西優さん（立命館大学 大学院生）

話をしている小学生がいるが、どう声をかけたらいいか」といった質問もあり、ヤングケアラーへの関心は高まりつつあり、すでに身近なところで気づきがあることがうかがえます。

相談したいと
思ったときに相談
できる関係づくり

「ヤングケアラーは、単純にケアをしているこどもだけの問題ではなく、家族に対しての支援が必要であり、制度だけではどうしてもフォローしきれないところがあります。まずは、ヤングケアラーとは何かを知り、近所同士で気づきの目を増やすことが大事です」と長谷川さん。講師の河西さんも「大切なのは、誰も孤立させないこと。ちょっと相談したいと思ったときに、普段から声をかけてくれる近所のあのおばちゃんに相談してみようかなと思えるよう、近所の人同士での日常の会話を積み重ねてほしいです」

支えのひとつに
なりえる支援を

近所にいるこどもに対して、「ご飯食べた?」「今日は何をしてた?」「何かあったら教えてね」といった声かけは、特別な支援ではありませんが、こど



▲区社協の長谷川安伸さん

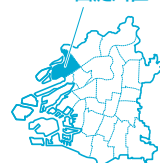
もたちの支えのひとつになります。「ヤングケアラー自身が気軽に参加できるイベントがもっとあればいいなと思います。自身の求めていることに向き合って語る場だけでなく、オンラインで参加できて他の人の話を聞くだけでもいい集いがあったら参加しやすいと思います」と、河西さん。

区社協では今後、ヤングケアラーが自由に集まり、気軽に話せる、当事者の会や集いの場など、課題をふまえた新たな居場所づくりを模索していきます。



3密さけて心は密に あなたにわたしにボランティア ーにしよどがわボランティアエキスポー

西淀川区



晴天に恵まれた5月29日の日曜日、西淀川区の「もと歌島橋バスターミナル」を会場に「第3回にしよどがわボランティアエキスポ」が開催され、約600人が来場しました（主催：西淀川区地域振興会、西淀川区ボランティア・市民活動センター）。

入念な感染対策で
集合型イベントを
実現

敷地内にはボランティアに関する展示・体験コーナーなど16のブースが並び、親子連れから高齢者の方まで楽しみながら活動を知ることが出来ます。会場奥の舞台では、楽器演奏などのボランティアグループが計12演目を披露。コロナ禍では久しく味わうことがなかった熱気あふ



▲ボランティアエキスポへようこそ！



▲日頃の活動をブースで紹介

2度の中止を
乗り越えて復活

ボランティアエキスポは、ボランティアの参加促進、活動の周知などをねらいに平成30年から2年連続で開催。令和2年はコロナ禍で開催を見送り、翌年

れる空間となりました。

受付で名前・連絡先・体温を書いて入場するなど感染対策も含めて、西淀川区で活動するボランティアの方々が準備・運営の隅々まで、担っていました。

企画もふりかえりも
自分たちの手で

は実行委員会で準備していたところ直前で再び中止に。「今度こそは」と挑んだ今年は、実行委員会メンバーが、ブース・舞台企画などの「当日班」、撮影と開催後の動画配信を担う「WEB班」、そして「コロナ対策班」に分かれて準備を進めてきました。

西淀川区ボランティア・市民活動センター（区社協）では、登録グループが交流する「ボラセンGO！連絡会」、その企画会議「ボラセンGO！GO」、異業種交流会「にしよどリンク」など、ボランティアが主体となった場づくりや企画・運営を大切にしてきました。区社協職員は調整・サポート役に徹し、その積み重ねの先に今回のイベントもありました。
6月20日に開催された会議（ボラセンGO！GO）では、中心となったメンバーが集まり、

来場者に聞きました

「今、誰でもできる
ボランティアって
どんなことだと思いますか？」

- ☐ 自宅の周りや公園・街中のごみ拾い
- ☐ 身近な人へのあいさつ・声かけ
- ☐ ちょっとした手助けをする
- ☐ フードドライブ
- ☐ エコキャップなどの回収活動
- ☐ 小さい子どもたちの見守り
- ☐ イベントのお手伝い
- ☐ 寄附・共同募金



「飲食ブースなしで、600人もの人が久々に集まってすごい」「西淀川でがんばっている人たちにたくさん会えて、いろいろやっていきたい思いが膨らんだ」「ボランティアは、目の前の相手（あなた）がいるからできるし、そこで自分（わたし）がもらえるものもある。テーマの「あなたにわたしにボランティア」を実感した！」とふりかえりました。

「次の連絡会、みんなはどうふりかえる？」「まず来年もするかをみんなで決めよう。するならどんなアイデアがあるか出し合って」。これからも自分



▲演者と来場者がシンクロするひととき

たちの手で、仲間を広げながら西淀川区のボランティアの未来を描いていきます。

善意銀行

—皆さまの善意を大切に—

市社協では、善意銀行を設けて皆さまからの善意のご寄附を、施設や団体へ払い出したり、助成金として活用させていただくことで、地域福祉の推進などに役立てています。

令和4年2月24日、善意銀行に大阪市介護予防ポイント事業活動登録者様から、これまでの活動で貯めたポイントを換金した5000円の寄附をいただきました。

介護予防ポイント事業とは？

事前に研修を受けて登録した65歳以上の方が、介護保険施設や保育所を対象となる活動をおこなった場合に、ポイントが貯まり、換金することができ、生きがいきりや介護予防を目的とした事業です。

介護予防ポイントの換金方法について、指定口座への振込みだけでなく、希望する寄附団体への寄附が選択できるようになりました。（毎年12月1日～12月31日のみ申請可能）

活動の流れ

研修の受講、参加登録

施設などへ活動を申込

施設などで活動

ポイントを貯める

ポイントを交換する

ポイントについて

2時間未満の活動

1ポイント

換金は1ポイント

100円

※6ポイントから換金可能

2時間以上の活動

2ポイント

活動内容(例)

介護保険施設・事業所

- ☐ 施設利用者の話し相手
- ☐ 園芸(草木の手入れ)
- ☐ 演芸の披露など

保育所等

- ☐ 行事、遊びなどの補助
- ☐ 登校園児の見守り
- ☐ 園庭の手入れ



▲登録時研修の様子

風をよむ

社会福祉士養成における新カリキュラム
「ソーシャルワーク実習」の
三者協働を考える

大阪公立大学大学院 生活科学研究科 中島尚美

国家資格の「社会福祉士」養成における新カリキュラムが、令和4年度から本格的に始動する。それに伴い実践現場における実習教育の時間数が現行の180時間から240時間へと増えることとなる。

今回の養成カリキュラム

の見直しの背景には、国のめざす地域共生社会の実現を推進することにある。社会経済状況等の変化による人々のニーズの多様化・複雑化に伴う課題に対応するソーシャルワーク機能を発揮できる社会福祉士が求められており、更なる実践能力を高めていくためには、実習や演習教育を充実させていくことが不可欠とされる。

そのため「ソーシャルワーク実習」においては、時間数の増加とともに、機能の異なる2カ所以上の実習施設での実施が要件となった。1カ所180時間以上の実習と2カ所目との組み合わせは、実質、養成校側に委ねられることとなり、実習実施の学年も、実

習時間数配分も、実習実施時期等も、多様な形態が存立することとなる。混乱を避けるためにも、時間の消化にばかり意識が向かわないためにも「何を目標とした実習であるのか」を実習生・実習先施設・養成校間で明確にすることが求められる。

新カリキュラムでは、今まで強調されてきた「実習生×実習指導者×養成校教員」の三者協働が影を潜めてしまっているように思われる。今回の見直しにおいても学ぶ権利の主体である実習生の意見がどのように反映されたのだろうか。240時間の実習を意味あるものとするためにも、実習生の抱く課題意識を中心に据えて、2箇所の実習の連関を検討し、学びの継続性を担保し、実習生の成長過程に沿った三者相互の学び合いの協働作業を行っていくことが不可欠である。これこそが、実践力向上の鍵になると考える。

(注)※参考：「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/content/000523365.pdf>

令和4年度赤い羽根共同募金記念バッジデザインは 「善意を運ぶ赤い羽根の舟」に決定

10月1日から全国で実施する第76回赤い羽根共同募金運動で使用される記念バッジのデザインが決定しました。近畿6府県(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)共同募金会が合同で募集。98点の応募作品のなかから、選考委員会の審査の結果、赤い羽根賞(最優秀賞:採用作品)1点、愛ちゃん賞(優秀賞)5点、希望くん賞(奨励賞)20点を決定いたしました。

採用されたデザインによって製作した記念バッジは、今年度の共同募金運動期間中に、共同募金に協力いただいた方へのお礼や、共同募金をPRするためなどに、近畿6府県を中心に広く活用されます。

赤い羽根賞(最優秀賞:採用作品)



※バッジの直径は
17mm程度

〈作者〉^{かね こ}金子ひろ子さん(大阪府・自営業)

〈制作意図〉赤い羽根を舟に見立て善意を運ぶイメージで描きました。

愛ちゃん賞(優秀賞)・希望くん賞(奨励賞)

受賞者・受賞作品については、大阪府共同募金会のホームページに掲載いたします。

●本会ホームページ【赤い羽根おおさか】

<http://www.akaihane-osaka.or.jp>

お問合せ先

社会福祉法人大阪府共同募金会 担当:熊谷、内藤

〒542-0065 大阪市中央区中寺1-1-54

大阪社会福祉指導センター2階

☎ 06-6762-8717

☎ 06-6762-8718

✉ ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp

🌐 <http://www.akaihane-osaka.or.jp>

市社協ホームページに関する アンケート調査にご協力をお願いします



●アンケートの回答は市社協ホームページから
<https://www.osaka-sishakyo.jp>

●回答期日:令和4年7月15日(金)

QRコードからでも
回答いただけます!



立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

クルマの保険 火災の保険 火災の保険

www.ms-ins.com

情報発信を強化し、市民の皆様に情報をより分かりやすく伝えるために、ホームページの内容改善に向けてアンケート調査を実施します。

いただいた意見をもとに、ホームページの内容を検討していきます。「こんな情報があったらいいな」「もっと見やすくしてほしい」など、皆様のご意見をお待ちしています。ご協力よろしくお願いいたします。

